

祖書五大部の綜合觀 (其三)

大僧正 本 多 日 生

報恩諺を中心としたる考察 (承前)

そこでこの四恩六恩の事は今申す通りに、阿含經を初めとして一切經の到る處に説かれて居る譯であるが、殊に詳しくその事を説かれて居るのが心地觀經といふお經である。その中に報恩品と稱する品があつて、四恩の報恩に關する事をよく説かれて居る、これは有名なものである。いま一つは法華部の中に大薩遮經といふお經がある、その中に王論品といつて、國王の心得を教へられる中に、四恩の道徳が、一層詳しく説かれて居る。それは法華部といつて、法華經と同じ部屬の中にあるお經である、日蓮主義者はこの大薩遮經の王論品の四恩の思想を忘れてはならない。それが強く日蓮聖人の頭腦に入つて居る、

だから日蓮聖人の信仰および宗教行動といふものは、唯だお有難主義の朝から晩まで鐘をカン／＼叩いてナンマオダー／＼とやつて居るのとは違ふ。非常に信仰の内容が活き／＼した立派な道徳的活躍が起つて来て、それが立正安國論ともなり、それが北條と關ふ勤王の忠義の行動ともなり、それが爲に頭の座にも坐り、流し者にも遣ふといふやうに、その一代の艱難辛苦は單に法難といふだけではない、即ち道徳行動の上に於て勤王の大義を説いて鎌倉の横暴を叱咤した爲めに起つたところの、即ち忠義の上から來た迫害である。

さういふ風に信心の中から道徳の華が咲いて出る

どこに、日蓮聖人の教の特色がある譯である。それは何處までも守持て行かなければならぬ。唯ドンドコ、太鼓ばかり叩いて、一貫三百どうでも宜い……と言つて、信心の中に斯ういふ特色があるといふことを忘れてしまつては駄目である。然るに今の所では法華宗の特色といへば、加持祈禱でもして狐憑きでも落すとか、精神病院の出来損ひのやうな事をして警察へ引張られるやうな事をするとか、又佛立講みたやうに唯カチ／＼南無妙法蓮華經……とやれば病氣が癒ると言つて、譯もわからずにやりさへすが正義を主張してやるやうな事はどうも一般にはウケが悪い、あなたもそんな頑固な事を言はずにカチ／＼やつたらどうです、あなたがやつたら餘程效能が良いでせう」ナンと言つて勤めに來る者がある。けれども釋尊の御教はさういふものでない、日蓮聖人の一代の行動はさういふものでない、又現代社會

それは其の時代の人が覺醒めないものであつて、教の科ではない。涅槃經に説かれて居る通りに、梅檀香木を賣りに歩く者は、朝から晩まで賣り歩いて一人も買手が無い、それは香木の値段が高いからである、炭を賣りに歩く奴は、車に満載して來たものを正午にならぬ内にスツバリ賣り盡して歸つてしもふ、翌日も亦梅檀香木を賣る者と炭を賣る者が一緒になつた、「お前は今日も亦みんな賣つてしまつたか」「エ、午前十時ですけれどもモウ炭は一俵も残らず賣つてしまひました」「サウか、そんなに賣れるならば俺も一つこの香木を焼いて炭にして賣つたら賣れるだらう」といふので、その梅檀香木を焼いて炭にして賣りに行つたところが、忽ち賣れてしまつた、その代りに値段は僅か五錢か三錢にしかならなかつたといふ話がある。宗教といふものは、唯だ信者の數が澤山居るのが良いといふものではない、若し數を澤山集めようと思ふならば造作はない、加持

が要求する宗教もさういふものでない。そんな事をいつ迄もやつて居れば、それは年と共に亡びて行くものである。天理教が盛んだとか。大本教が盛んだとか言つても、そんなものは唯だ人心頽廢の内に生へた徴みたやうなものである。そんなものは入梅時に生へた菌と同じで、澤山生へるやうでもいつの間にか腐つて無くなつてしまふ、山に行くごとく、茸といふものが澤山生へて居るけれども、十日も経てば皆ズル／＼に腐つてしまふ、そんなものは決して山に生へて亭々と成長する松の木でも杉の木でもない。

吾々が志を立て、命に懸けても宣傳しなければならぬ日蓮主義なるものは、そんな山に生へるくそ茸みたいなものであつてはならぬ。何處までもこの日本の國の前途、人類の文明の將來に光を與ふべき使命を有つたものが日蓮主義である。現代に賛成する人が多いか察いとか、そんな事は問題でない、

祈禱でもやるといつて坊主の五六人も集めてドンドコ太鼓を叩いて、私が白い衣でも着てチャキ／＼やつてどんな病氣でも癒るといつて宣傳したならば、チキにこの會堂に溢れる位の人は集まるけれどもそんな事が眞の宗教ではない、病氣が癒らぬこともないけれども、そんな事が宗教の御利益ではない、モツと腹の底から信仰に依つて本當の健全な人間を造らなければならぬのである。

日蓮聖人の教が、この信心と報恩の道徳といふものを併せて現はれて居ることを能く味はつて見なければならぬ。「畜生すら恩を報ず、況んや人倫をや」と、説いて來て、更に「古の賢者かくの如く恩を報ず、いかに況んや佛法をならはん者をや」といふ風に語を進められ、而して佛教の方から言ふ本當の恩を報ずるには深い教を明かにしなければならぬといふ所から、日蓮聖人は佛教を研鑽して所謂思想的の道徳模範者となられたのである、父母に對しても

深い／＼思想の上からこれをお救ひになり、師匠に對しても國に對しても、一切衆生に對しても、唯だ表面から與へるところの親切や報恩ではなくして、非常な根底深いところの慈悲より發して、根底深いところの報恩の行動となつて、後代にその範を遺された譯である。

斯の如く報恩鈔には、日蓮聖人の報恩道徳に關する思想が鮮かに示されて居るのであるが、これが五大部の他の御遺文にはどういふ風に現はれて居るか。先づ開目鈔を見るならば、開目鈔の中には劈頭第一に

一切衆生の尊敬すべきもの三あり、所謂主師親これなり。(七四七)

と書かれた。この尊敬といふことは、下から言ふから敬ふと云ふのであるけれども、敬ふといふことはその御恩を知つてそれに感激することも自から加はつて來るのである。敬ふとか、或は感ずるとかいふ

本佛であること、始なき以前より終なき後に至り、如何なる場所に於ても釋尊が吾々を導いて下されて居るのである、いろ／＼の佛の名前が佛教に現はれて居つても、それは皆釋尊の設法である、藥師如來とか阿彌陀如來とか、そんなことは釋尊が設法に言ふた言葉である、眞の佛は釋尊である、その釋尊が今度ばかりではない、いつでも汝等の爲めに慈悲の活現をして居るものぢやないか、これを徹底的に説かれた。さうしてそれが汝等の父である、「我も亦爲れ世の父」と仰せられて居る、吾々の肉體には親がある譯だけけれども、それは人間の親である、吾々の魂、始もなく終もなく續いて行く魂がいろ／＼迷うたり、苦を重ねたり、或は畜生に墮ちたり餓鬼に墮ちたりする場合でも、何處までも見捨てずして助けて下される佛は、この壽量品に顯はれたる釋尊である。さればこそ吾々が娑婆世界に生れて居る場合には、此處に釋尊が現はれて來て佛法をお説き下さ

ことは同じ意味である、御主人である、お師匠様である、親であると思つて敬ふといふことは、親の恩、師匠の恩、主人の恩といふ、所謂主師親の三徳といふ三つの恩徳に對する感激の精神となつて現はれて來るのであるから、そこで此の開目鈔の出發點からして非常な道徳的の觀念がそこに強くあるのである。それ故に本當の佛様を知らない者は不知恩の者であるといふことを論ぜられた、不知恩とは恩を知らない畜生であるといふ風に、恩の問題に移して論ぜられて居るのである。それは開目鈔の下の卷に明瞭に、

壽量品を知らざる諸宗の學者は畜生に同じ、不知恩の者なり。(七九二)

と書かれて居る、これは決して日蓮聖人が嗾だ亂暴にそんな事を仰しやるものではない。壽量品を知らざるといふことは、法華經の壽量品に於て釋尊の本當の有難さが十分に顯はれて、さうしてその釋尊の

れた、迦毘羅衛城の悉達太子として生れて出家成道を遂げて、斯の如くに一代の佛法を遺されたのである。何といつても釋尊に依つて吾々は導かれ、教はれて居る、この大きな事實を忘れることは出來ない。その通りに吾々が若し迷うて餓鬼に行くとか、憐れなる境遇に墮ちても、又そこへ救済の光が指して來るのがこの釋尊の光であるといふことを知つて、お釋迦様の尊いことを徹底的に考へれば宜いのに、それを釋尊を忘れて他のものに心を奪られるといふものは、尊き親を忘れた畜生である。畜生といふことは恩を知らない者を言ふのである。「恩を知らざるを畜生と謂ふ」といふことは、日本の俗諺にもなつて居るけれども、支那でもやはりさう言つて居る、日蓮聖人は開目鈔の中に妙樂大師の文章を引かれて、父統の邦に迷ふ、徒に才能ありと驛も全く人の子に非ず。(七九二)

に非ずと言はれる。この婆娑世界はお釋迦様に依つて救はれて居るのが佛法の立前であるのに、そのお釋迦様の有難い救済の力を信じないが故に、人の子に非ず、でそれは畜生であると言はれるのである。此處には詳しく論ぜられて、『壽量品の佛を知らざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生』であると斷定されて居る。これは道德的の判斷から、『諸宗の學者畜生に同じ、不知恩の者なり』といふことが出て來るのである。

この道德的觀念が國家の方に對して行けば、それが北條の惡逆を攻撃するところの勤王の大義となり、各宗の誤れる坊さんに對するときは、即ち壽量品の本佛を光揚して不知恩の者と言はれるのである。それは一王一佛主義といつて、日本の國家に於ては一人の天子様、萬世一系の皇統を戴き、大宇宙に就ては絶對無上の本佛を戴く、この大宇宙に於ける壽量本佛の尊嚴と、我が國家に於ける皇室の尊嚴

うでも宜いといふ譯にいかぬ。法華宗ばかりではない、各宗を通じてこの佛に依らなければならぬといふので、日蓮聖人が命に換へてこれを御主張なさつたのである、公場對決といつて、時の政府の力で各宗の偉い學者を一遍に寄せて呉れ、一擧にして日本佛敎の正統思想を發揚して見せるから、日蓮の矢面に立つ者があるならば出て來いと絶叫したのは即ちそれが爲である。爾來六百數十年、未だこの日蓮の主張は一微塵も破られて居ない、刃を以て頭を斬らんとするやうな亂暴は出來るけれども、この正義の前に立ち得る者は一人も無い譯である。現代でもありはしない。だからその壽量品の本佛の釋尊の尊嚴を命を以て護つて行くと同時に、國に於ては皇室の尊嚴を命を以て護つて行くといふ所に、日蓮主義は立てられて居るのである。

斯くして報恩の思想といふことは、開目鈔に依つても能くわかるのである。『不知恩の者なり』といふ

とを明かにする爲に、一つは各宗の不知恩の僧侶に對して折伏を加へ、一つは惡逆なる北條氏に對して諫争を試みたのが、日蓮聖人の道德行爲となつて現はれて居るのである。それは一貫して居ること、一つの國には一人の王様、一つの世界には一人の佛様といふことになつて居る、それを日蓮聖人の一王一佛主義と簡單に言つて居るのである。さういふ大事なことは、一貫三百どうでも宜いといふ譯にはいかん、日本の國に於ては、如何なる者が現はれても皇室の尊嚴を忘れてはならないといふ事は、何處までも心得て行かなければならぬ、億兆心を一にして世々厥の美を濟すといふ勤王の大義は、子孫臣民の俱に遵守すべきところ、快して忘るべきものではない。佛敎の方で言へば壽量品の本佛を絶對として、吾々はそれに救はれ、それに感激をし、それに報恩の誠を捧げるといふのが佛法の正しい意味の信仰であり、報恩であるといふことは、これは一貫三百ど

ことは、諸宗の學者でも日蓮門下の人でも同じことである。壽量品を知らざる諸宗の學者とあるけれども、諸宗ばかりではない、壽量品を知らざる日蓮宗の學者でも、學者でなくとも日蓮宗の信者でも、この壽量品の本佛の絶對の尊嚴を知らざる者は不知恩の者である、皇室の尊嚴を知らない者は非國民じやといふも同じことである。學者であらうが不學者であらうが、そんな事に依つてその責を免るべきものではない。それを日蓮聖人は謗法の罪科と言はれるのである、國家でいへば逆賊といふことである。壽量品の本佛を尊信せざる者を謗法の罪科として、國家でいふ大逆賊と同一視して教を立てたのが日蓮主義である。それを平氣でこの逆賊的の謗法の行爲を敢てするといふことになつて來て、今日は日蓮門下が紊れて居るのである。

又開目鈔には、法華經が親孝行の上に於ての報恩の教であるいふことを説かれて居る。

今法華經の時こそ女人成佛の時悲母の成佛も顯はれ、達多悪人成佛の時慈父の成佛も顯はる。此經は内典の孝經なり。(八〇四)

法華經は提婆品の時に女人成佛といふことが顯はれた、他のお経では女人は罪が深いといふことを説いて、成佛が覺束ないやうに見えなければ、法華經には有難いことに女人が最も早く教はれた、提婆品に於て龍女が成佛を許されたことが詳しく説かれて居る、その女人成佛の時に自分の母の成佛が保證される譯である、同じ女であるから、提婆品で女が成佛出来るといふことになれば、自分の母親も法華經に依つて信仰をすれば成佛が保證される譯である。又提婆達多が成佛を許された、提婆達多は釋尊に反抗をし、いろいろの罪惡を犯した悪人の手本とされて居る、その提婆達多が法華經に依つて成佛を許された。さういふ悪人でも成佛を許されるのだから、自分の親が少々罪を作つて居つてもそれは法華經に依

にはなれないけれども、少しづつでも信心すれば人格が善くなつて行くといふことを、教旨の大事な点に置かなければならぬ。信心さへすれば人間行爲の方は無責任で宜い、善い事が出来る位なら信心などはしないのだからどうぞ、そこは御免を蒙りまして……といふやうな譯で、信心して居るから少々悪いことをしても差支ない、お婆さんで言へば、一方で嫁を虐めたりしていろいろ罪を作つて居るから、佛壇の前で手を合せるのでございませう、ナンマイダ……これでモウ安心だ、悪い方は幾らやつても五圓が十圓位のものだ、ナンマイダーの方は一萬圓も御利益があるのだから、差引して大丈夫地獄へ行くやうな心配はない、斯うして置けば安心して悪いことが出来るといふやうな教へ方をした宗旨もある、さうすると大變俗受けが良くて流行る。それは丁度西洋で羅馬法王が、どんな罪惡を犯した者でもこのお札を買つて置けば助かるといふので、お札は

れば成佛が保證される譯である。して見れば法華經に依つて父母に向向し、父母を導いて行くならば、母親も父親も共に教はれるから、この法華經は内典の孝經であると言はれる、内典の孝經といふのは、佛敎から言へば外典であるところの儒敎の方の書物に孝經といふものがある。それはなか／＼立派な書物であるが、それにも優つて内典の孝經——即ち佛敎の内にあるところの親孝行のことを教へたお経であると言はれるのである。法華經の内には直接親孝行のことは説いてないけれども、今の大薩遮經の四恩の所には、父母に對する孝道といふやうな事がハツキリ説かれて居る。

法華經はさういふ道德經である、信心と道德といふ事を切離さぬやうに考へて行かなければならぬ、信心はするけれども親不孝だとか、信心はするけれども無慈悲の人間だといふことではいけない。それは人間にはいろいろ癖があるから、一遍に綺麗な者

裁判所でも通用する、どんな悪い事をした者でも、いよ／＼大審院の判決がきまりかけた時分に、懐中から法王のお札を出して見せる、「此の者は善人なり」と書いてあるから死刑の宣告を下すことが出来ないといふやうな時代があつた。それと同じやうな譯で、阿彌陀様といふのは羅馬法王みたやうな調子で、それは世間では悪人といつても、俺の所ではその儘持つて来れば宜い、何も心配はない、俺は寧ろ悪人の方が好きだ、善人はつべこべと自分の力を頼みにするけれども、悪人はイキナリ從順にへいと頭を下げる、頭さへ下げればボンと教つてやる……といふことになつて、悪人正機といふやうな事まで言つたのである。それはさういふ奇矯な信仰であるから一時は非常に流行つた、今でもまだなか／＼流行つて居るけれども、それは如何にも醜劣い事である。さういふ宗敎の盛んな國家社會は淺ましき哉と謂はなければならぬ。

左様に道徳上の責任を解除して貰つて、それで喜んでこれが一番良い宗教ぢやなどと考へて居るのは、一番悪い事である。少しでも人間は善を爲さうと考へなければならぬ、思ふ程はなか／＼出来ないけれども、所謂志を立て、設ひ僅かでも善い事をしようといふ道徳觀念が無ければならぬ。又人を教へるには、私のやうな者にはなか／＼善い事は出来ませんと尻込する者を鞭撻して、イヤさうではない、やる氣になりさへすれば出来るものだと言つて、その者を啓發して行くことが大事ナンである。儒教の書物を見ると、或る王様が、俺はどうせ碌な事は出来ない、「寡人色を好む」――俺は女が好きだから道徳などは嫌ひだといふやうな事を言ふと、孟子はスグにそれに對して、イヤさうではございませうまいと言つて、その王様のちよつとした善い事を捉へて、あなたは此の間斯ういふ善い事をなさつたではありませんか、それにどうして善が行へなといふ

理由がありますかと言つて、だん／＼其の人を啓發して行つた、それが大事である。教育とか宗教といふものは、人の微善と雖もこれを導いてだん／＼に發達せしめなければならぬ。それであるから佛は少しでも善い事はせよ、小善の中に廣大なる功德がある、その人の力堪へなければ、小さな善でもその中に廣大な功德がある、小善成佛といふことを説かれた。それは實に善い思想であつて、力の足らぬ者に無理に強いるのではない。一貫目の物しか提げられない人間に二貫目の物を持つてと言つても持てないが。一貫目の物しか持てない者には一貫目の物を持つてよといふ、これは實に尊い事である。だから國家の爲に盡すといふことになつた時に、大した力が無ければ草鞋を一足拵へてそれを國家に献じて、その志は實に尊いものナンである。親に孝行するといつても何にもする力がなければ、孔子が言ふやうに色を和らげるといつて、笑

顔を見せるだけでも親孝行になる、いつも氣分の悪いやうな顔をして居る人間が、ニコ／＼して見れば、親はその容貌を見ただけで非常に満足するそれでも親孝行は出来るぢやないか、心懸に依つて善といふものは必ず行ひ得るといふことを獎勵して行かなければいかぬ。だから日蓮聖人の如きは、雞でさへも卵を温め雛を可愛がつて居るではないか、彼にも菩薩の行がある、況んや人間をやといふ風に獎勵せられたそれが、實に尊い所である、むやみに尻込させるといふ事は最も宜しくない、とても／＼そんな菩薩行ナンか出来るものぢやない、第一人間行が出来ないぢやないか、どうして菩薩行などが出来るものか」といふ風に、だん／＼人間を墮落性、頹廢性のもに解釋して行けば、天下は滔々として皆腐つてしまふのである。

て可いのである。むやみに人間といふ者はつまらぬものだといふ、それは進化論などでも下手にやれば、人間は元は猿だ、猿に似たやうなものだといふのである。本當の學者は、猿の中から進歩して來たのだからなか／＼人間は偉いものだ、だん／＼進歩すればモット偉いものになれるといふやうに説くのであれども、多くの學者は、どうせ猿から來たものだから、大體種が猿ぢや、猿とあまり違つたものではない……といつて、逆戻りをするやうに説くのである。猿から折角人間まで來たのだから、モット向上して行かうといふ……そこが考へ所だけれども、ごちらかといへば近代思想は、人間だもの……どうせ猿だもの……段々退歩するやうな事を言つて居る。さうなれば社會は實に淺ましきものになるのである。だから「孟子は盡つて進まず」といふことを警めて、私はモウ此處から先は歩けませんと自から線を引きことが悪い、何處までもやつて行かう、親

孝行が出来なければ笑顔を作つても親に安心をさせようといふ所から、その微善を啓發して行つた。佛が菩薩行を説くに當つても、全分、多分、一分、微分といふ風に言はれて、微分といふホンの僅かばかりでも菩薩行をやるが宜しい。初めから全分を完全に行へないからといつて尻込することはないと教へられて居る。孟子もやはり「仁禽獸に及んで何ぞ人に及ばざるや」と言つて居るが、そこが實に良い所である、教を立てる方針はそこである。

さうして又その人間が完全に行へないからといつて、それを非難したり威かすといふことは非常に悪い事である、さういふ坊さんや學者の態度は實に間違つて居る。「そんな偉さうな事を言つたつて、人間が朝から晩まで善い事ばかり考へられるか、碌な事は考へまいが……」それはさうだ」「それ見イ……」といふやうな工合に、悪い方へ」と引張つて行くそれは誠に宜しくないやり方である。人間はだんだ

思想が漲つて居るが、次にこれを立正安國論に依つて見れば安國論そのものが既に國恩を報ぜんが爲めに現はれて居るのであつて、その儘報恩道德の書物といつても宜いのである。即ちその内容を見ると、法師は諛曲にして人倫に迷惑し(三七七)

といふことを攻撃されて居る、坊さんが根性が拗けて居つて、人倫道德を忘れて居る。習ひ損ひの禪宗坊さんなどは、佛法に入つた以上は親子の關係とかそんな世間の關係はどうでも宜い、本來無一物、色即真空、空々寂々、ボク／＼ぢやといふやうな超越的な考になつて、國家を超越し人生を超越して唯だ天の一方に一圓相を描いてボカーン……といふやうな事が佛法だと考へ、それが高い事のやうに思つて居る。又淨土門もその通りで、人間の世の中の事はどうでも宜い。どうせ罪の人生だ、阿彌陀様に絶つて助けられさへすれば宜い、ナンマイダー／＼と言つて人倫道德を顧りみない。一方は本來無一物ボ

んに養つて行けばどういふ者でも善くなる「人尤惡なるは鮮し、教ふるに道を以てすれば必ず化す」と聖徳太子の言はれた通り、だん／＼善くなる、その善くなる所が人間である。斯ういふ所謂教化の可能——人間は向上するものなりといふことを前提として道德、宗教は立てて行かなければならぬ。

日蓮主義はそれが本領であつて、その點がハツキリして居る、他の宗教のやうなマゴ／＼したものは無い。今の法華信者は途中から紛れ込んで来た墮落派であるから駄目である、どうしても先づ志を立て、來なければ日蓮門下に入ることは出来ない、謂はゞ氣の利いた者が入る宗教である。グジャ／＼した、おぢやともつかずお粥ともつかないやうながんだ飯みたいな者の入るべき宗教ではない、お粥ならお粥で上等の氣の利いたお粥でなければいかぬ、日蓮主義はそんなだらしないものではない。そこで開目鈔に於ては今言ふが如くに報恩主義の

カーン……一方はナンマイダー／＼……一向道德上の規矩準繩といふものが立たない。さういふ佛法であつてはならぬから、「法師は諛曲にして人倫に迷惑し」と喝破されたのである。さうして君の君たることも知らないで、何でも油揚さへ食はして呉れ、ば有難いといふので、天皇を流し奉りたりするやうな惡逆なる北條幕府に頭を下げて居る。北條は實に我國の歴史に曾てない惡逆無道の事をして居る、然るにあの當時の事を批判するのでもみなボンヤリして居る、學者はやはり北條の勢力が怖いものであるから、本當の事を書いて居らない、頼山陽が日本外史に北條の事を論ずるに當つて、實に峻嚴な筆を以て書いて居る、彼は日蓮聖人と同じ筆鋒になつて居る。水戸の光圀卿でも大日本史を見ると、北條を論ずることは甚だボンヤリして居る、北畠親房卿も北條に對する意見は明確でない、況んやその他の儒者輩に於てをや。山陽にして初めて「北條氏の事、吾れ之

を言ふに忍びざるなり」と言つて、實に承久の乱く
 らる惨酷な無道な事をしたものはない、鬼か畜生か
 といふ程に北條を論難して居るが、日蓮聖人はその
 北條が勢力を得て居る時に正々堂々とそれを主張せ
 られた、實に偉いものである。山陽は北條の事はそ
 れ程に言ふけれども、徳川の事はヨウ言はない、徳
 川氏は源氏から出たものだから榮えるだらうと言つ
 てごま化して居る。日蓮聖人は現に北條が鎌倉に勢
 力を得て居る時に、鷹岐の法皇は天子なり、権の大
 夫は民ぞかし」と喝破して北條の惡道を攻撃せられ
 た。

安國論にはさういふ風に「法師は詔曲にして人倫
 に迷惑し」と言つて當時の僧侶を攻撃せられて、随
 分強い言葉も使はれて居る。犬が尾を振つて魚を貫
 つて喜んで居るやうな有様ちやと言はれて居る。こ
 の頃も説教強盜の騒ぎに就て、犬を用心の爲に飼つ
 て置いて、泥棒が入つて来て〇〇を犬に與へると、

スグ尾を振つて行くといふことが新聞に出て居つ
 た。其〇〇といふのは何であるか判らぬが、日蓮聖
 人の當時の坊さんはやはり〇〇を貫つて尾を振ると
 いふ有様であつた、そこで折角斯うして泥棒の用心
 の爲に飼つてある犬が、〇〇を貫つて尾を振つては
 役に立たんぢやないか、そんなものは叩き殺した方
 が宜からうと日蓮聖人が論斷された譯である、それ
 が立正安國論の上に現はれて居る、即ち報恩の道徳
 に於ける義の觀念を、潔く説いたものである。

又安國論の中には、

弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ、何ぞ佛
 法の衰微を見て心情の哀愴を起さざらんや。
 (三三三)

と書かれた、この「弟子一佛の子と生れて」といふ、
 そこに佛様を親として親子の觀念を以て、さうして
 その佛恩を報ぜんが爲に命に換へても佛法を護らな
 ければならないといふ護法の精神に立つた。その護

法心の本は、一佛の子といふ釋尊に對する親子の情
 操であつて、その親子の情操から、佛恩を報ぜん
 するところの報恩道義の觀念が護法心に活躍したも
 のである。

又安國論の中に、國王の恩に感激して勤王の大義
 に現はれて來ることの如き、それは一昨日御書から
 見ればよく判るのである。即ち

方今世悉く關東に歸し、人皆土風を貴ぶ。
 (六八七)

と言はれて、考へて見れば日本は天子様の國である
 のに、北條の勢力に屈して、皆が北條を有難く戴く
 やうになつて居るのは如何にも心外の事だと慨歎せ
 られて居る。又

法を知り國を思ふの志(六八八)

と言はれた所に、大きな報恩主義の道徳精神が活躍
 して居るのである。だから安國論も一面より見れば
 報恩鈔である、開目鈔も報恩鈔であると謂ふことが

出来る。

然らば本尊鈔はどうであるかといへば、本尊鈔も
 やはり大事な所は報恩の觀念に依つて論ぜられて居
 る。その最も著しいのは、

設ひ法は甚深なりと稱すと雖も未だ種熟脱を論
 ぜざれば還つて灰斷に同す。(九四二)

と書かれたことである、これは少し難かしい事だけ
 れども能く考へなければならぬ。「設ひ法は甚深な
 りと稱すと雖も」といふのは、眞言や華嚴のやうな
 威張つて居る宗旨を指したのである。彼等は眞言は
 大日經に依り、華嚴は華嚴經に依つて、法華經より
 も勝れて居るやうに言つて居る、さうして自分の方
 の法は非常に深いといつて誇り顔に論じたから
 といつて、種熟脱を論ぜざれば灰斷の説と同じも
 のである。種熟脱といふのは一切衆生が救はれこと
 を種を播くことに譬へたのである、丁度苗代に米の
 種を播いて、それが段々熟して來てさうして米が出

来る、その中に於て最も大事なのは「種」といふ種を
 蒔くことである、種を蒔かなければ所謂「蒔かぬ種
 は生へぬ」である。それを下種益といつて、人間に
 は佛性を本来有つては居るけれども、その佛性を啓
 發することの了因種といふものを與へられなければ、
 佛性は開かれない。モツと他の譬で言へば、女
 が子供を産むべき素質は有つて居る、けれども良人
 といふものが無かつたならば子供は出来ない、だか
 ら子供が出来たといつたならば、良人があるといふ
 ことを考へなければならぬ。妻が身體が丈夫で御馳
 走を食へたから子供が出来ました」といふ譯にはい
 かない。基督教のマツヤ見たやうな女はどうして出
 來たか知らんけれども、併ながら西洋でも科學が進
 歩して來て、生理學、醫學といふものから論じたな
 らば、マツヤと雖も水を飲んで出來たのだとは決し
 て言へぬだらうと思ふ。そこに異論が起る譯で、此
 の頃は基督教でも、あまり大きな聲では、マツヤ童

貞にして孕めるありとは言はぬさうである、小さい
 聲で言つて居るといふことである。さういふやうな
 もので佛法で種熟脱を論じて居るといふことは、ど
 うしても佛性の啓發には本佛との感應といふものが
 無ければならぬといふことを論じてある、それが法
 華經である。他のお經にはさういふ事がないのであ
 る、だからその良人といふやうな意味合は考へて居
 ない、鬼子母神様を信ずるとか、お地藏様を信ずる
 とか、阿彌陀様を信ずるとかいつても、本當の對象
 が判らずに唯だ助けて下さい、救つて下さいとやつ
 て居る、まるで乞食が路傍に坐つて、誰にでも銅錢
 を投げて貰へば宜いと考へるやうな思想になつて居
 る。

法華經では、一切衆生は釋尊がその佛種を種ゑる
 ものちやといふことがハツキリ説かれて居る。それ
 は化城喻品の三千塵點劫の事柄、また壽量品に於て
 は五百塵點劫以來釋尊の化導を受けて居るものであ

る。その種熟脱の三益といふものを、大日經や華嚴
 經に於ては論じない、他の言葉を用いていへば、吾々
 衆生がお釋迦様のお世話になりかけたのは何時から
 であるかといふ事がわからない。法華經に來れば、
 お釋迦様にお世話になるのは今度初めてではない、
 吾々の魂が始めなき以前より續く限り、お釋迦様も
 始なき以前より御心配を下さつて、幾度も／＼お釋
 迦様の御力を戴いたものである、今度いよ／＼佛様
 に成るにしても、それはやはりお釋迦様の佛種を與
 へられたることに依つて、釋尊を良人として吾々は
 佛性の子供が芽を咲いて出るのちやといふことがあ
 る。さういふ事を大日經や華嚴經に於ては論じて居
 らないから「説ひ法は甚深なりと稱すと雖も、種熟
 脱を論ぜざれば還つて灰斷に同す」といふことにな
 る。灰斷といふのは小乗の或る思想であつて、人間
 が死んだら身は灰になつてしまひ、魂は消えて無く
 なつてしまふ、身も魂も空々寂々、何にも無くなつ

てしまふといふことが灰斷である。さうすると是れ
 は甚だつさらぬ事になつてしまふ、覺るといつて
 も、羅漢に成つたといつても、何にもない、身を灰
 にし魂を滅してしまふといふやうな有様で、さうい
 ふ空無の涅槃と同じ事になつてしまふ譯である。灰
 斷といふのは佛教で言へば小乗の空に歸する淺まし
 き境界で、最も輕蔑して居る言葉である、二乗の者
 は灰になつて消えてしまふといふことである。そこ
 で眞言宗や華嚴宗がえらさうに言つても、その灰に
 なつて消えて行く思想と違はないではないかと言つ
 て日蓮聖人が攻撃されて居るのである。その中心の
 思想が種熟脱の三益といふことであつて、而もその
 中では下種といふ事が最も大事なことになるのであ
 るが、その下種益を論ずるに就てはどうしても本佛
 釋尊を認めなければならぬのである。古來この本
 尊鈔に就ては、いろ／＼枝葉の理窟を言うて議論を
 する人が多いのだけれども、實は最も深い宗教的の

議論としては、やはり開目鈔に顯はれたところの絶對本佛を知らなければ、華嚴も大日も駄目だといふことになるのである。さうしてこの思想はそれが取りもなほさず道徳上の問題で、やはり本佛を知らざるが故に「灰斷に同す」といふやうな激しい非難を加へられる譯である。

それから撰時鈔には、サウはつきりした報恩の事に關する文章はちよつと見當らないけれども、撰時鈔の終りの方に涅槃經の文を引かれて(二四八)王様の使が他國に行つた場合には、設ひ身命に關はるやうな事があつてもその王様の言教を傷つけないやうに、主命を耻かじめないやうにしなければならぬ、そのやうに佛法を弘める者も、必ず佛の教には傷をつけてはならないといふ事がある。その涅槃經の文を引かれて、何故そんなに命に關はるやうな事があつてもやらなければならぬのか、身命を喪ふといふ事は容易ならぬことであるが、而もそれを冒して貫

かなければならぬといふことはどういふ譯であるか。それに就て日蓮聖人が言つて居られるのに、初め自分はこの經文に就ては、傳教大師や慈覺大師のやうに勸宣を受けて支那にでも渡つてさうして佛法の爲に盡すことか、或は玄奘三藏のやうに葱嶺を越えて天竺に行つて佛法を求めぬ事か、或は雪山童子などのやうに教の爲めに身を捨てて居る事かと思つて居つたところが、さうではなかつた、これは正法を弘めるに就てはいろ／＼の敵が現はれて來るが、その正法の敵に怖氣を懐かないで佛法の正義を弘めよといふことである。そうして左様に命に換へて法の爲めに盡さなければならぬのは何故かといへば、即ち法の恩、又佛の恩を念ふが故にサウしなければならぬのである。今日日本に於て法華經の正法をその儘間違はないやうに弘めようとする事は、大きな石を脊負つて大海を渡るよりも、裸で火の中に飛込むよりも難い事である。併ながら法華經の正しき意味の

通りにやるならば、人々は打ち殴り悪んでも、お釋迦様や諸天善神はこの法華經の行者に味方をして下されるから、必ずや安穩にして遂にその目的を達することが出来る。佛様を味方とせずしては法華經の宣傳は出来得ないものであるといつて、この撰時鈔には、何處までも佛の恩の有難い事、又護つて下されることを本にして命懸の布教といふことが論ぜられて居るのである。その間にはやはり報恩的精神から、法の恩、佛の恩といふものを念ふが故に、如何なる迫害の中にも命に換へてこれを弘めなければならぬといふ護法心が動くことを説かれて居ると思ふ。

その他立正安國論の事に就てもだん／＼言はれてあり、又彼の三箇の高名といつて、三たび日蓮聖人が國家を諫められたことが詳しく書かれてあるが、これ等は前に言ふ通り、いづれにも國家の恩を報ぜんが爲に國家諫曉といふ事が起るのである。そ

これは立正安國論と他の御書との連絡關係を述べる場合に詳しく申さうと思ふが、やはりその點から見れば報恩主義の精神が撰時鈔の中にも輝いて居るやうに思ふのである。

斯様にして報恩鈔に現はれて居るところの報恩道徳の思想は報恩鈔に限らない、開目鈔に於ても、安國論に於ても、本尊鈔に於ても、又撰時鈔に於ても、やはり全體を通じて日蓮主義の道徳觀念は報恩主義である。さうしてその報恩主義は信念の中から流れて居る、寧ろ信念の中に含まれて居るのである。吾々は力が足らないから思ふやうには出来なないかも知れんけれども、併し一分たりとも親に對しては孝養の事を考へ、國に對しては國恩に報じ、社會に對しては社會奉仕の考を持ち、教に對しては教の恩に報じ、夫婦の間には夫は妻に、妻は夫に互に恩に感謝し、師匠に對してはその恩を感激して行くといふ、報恩感謝の道徳を實行して行く所に日蓮主義といふ

ものはあるのである。それが濃厚により強く、より整頓して行はれる人が、日蓮門下の修行をする上七偉い人といふことになるのである。その志が薄いほど、小さいほど信仰が微弱な人と言はれる譯である。聲ばかり大きいから立派な信者といふ譯にはいかん、内容に於て報恩の道徳行為が活躍されれば、聲は小さくともそれは立派な人に違ひない。今の法華宗は太鼓の音と題目の聲ばかりになって、一生懸命に石油箱を叩いてガチャ／＼やつて居るのが豪いやうに思つて居るけれども、そんな事は實は婆羅門の型ナンである。お閻魔様などを祈つてある所に行く

とそれをやつて居る、お經などは讀んで居やしない、大きな鐘をガーン／＼と叩いて居る、一日叩いて八十錢といふ、日傭人足みたいな者が、朝の暗い内からガーン／＼やつて居る。あゝいふ風に唯だ蠟燭を立て、鐘をガーン／＼叩いて居るやうな型式化した宗教は、今後の社會に役に立たないものである。何

處までも落着いて佛に感激の心を持ち、或は君に對して感激の心を持つて、そこに報恩の働きを現はして行かう、それは各々職業が違ひ、又方面が違ふから、現はし方はいろいろ違ふけれども、或は教育の上に、或は政治の上に、或は商業の上に、あらゆる人の職業を通して報恩の行業を活躍せしめて行く所に、日蓮主義の教化があると思ふのである。その意味に於て祖書五大部の中に於ては開目鈔が無論大切であるけれども、同時に報恩鈔は「報恩」といふその表題からして、造次も忘るべからざる大事なものだと信する次第である。

祖書五大部の綜合觀としてこれ迄に開目鈔と報恩鈔に現れて居る御趣意が、互に五大部全體にその意味が聯絡されて現れて居ることを申述べたのであるが、次に本尊鈔、安國論、撰時鈔等に現れて居る教義がやはり相互に五大部の中に現れて居るものであつて、結局この五大部の思想が相互に關聯して、少

しも意味合の違ふものでないといふことを論結致したい。

觀心本尊鈔を中心とした考察

先づ觀心本尊鈔よりお話を進めて見たい。觀心本尊鈔は御本尊の事柄を主としてお書きになつたので、日蓮聖人の御教義の中にはこの御本尊のことが特に大事なことになる。それは凡そ宗教の大事なる點は本尊にある、哲學は眞理を目的として研究を進める、宗教は本尊を中心にして構成せられると言つて宜いので、宗教に取つての一番大事なものは御本尊のことである、それに依つて信仰をきめて行くのであるから、本尊が一切の教義の歸結である、一切の教義を纏め上げて出來上つて居るものが本尊である。總ての信仰なり行法が導かれるものは、本尊に依つて刺激せられ、本尊に依つて生氣を與へられて行くのである。本尊と離れては信仰といふもの

はないのである。本尊無しに信仰などといふものがあるかの如く見えるけれども、それは完全な意味に於ての宗教を成さない。若し哲學といふものが、眞理と離れて哲學があると言つたならば滑稽であるが如くに、宗教が本尊と離れて信心を有つて居るといふが如きことは、亭主無くして嫁さんだと言ふと同じ事で、「妾は嫁に行きました」「御亭主は……」「亭主はありませぬ」……それでは嫁に行つたのではない。嫁といふものは亭主があつて始めて起る語であるが如くに、宗教的の信仰といふことは本尊あつて始めて起る語である、それは宗教學上の定義として別に異論の無いことである。併し亭主無しに嫁に行く者は世の中に無いけれども、宗教の方では本尊を決めずして信心して居る者がだん／＼ある。何だかわからぬけれども先づ効験が良いといふやうなことでやつて見る、ちようど守札とか護符とかいふやうなものを戴いて、それを飲んだり懐ろに入れたりして信

心して居るといふ、「お前は何を信心して居るのか」、「何だかわからぬけれども、隣りの婆さんが斯ういふ守札を呉れて、これを紙入に入れて置けば宜いといふから大事にして居ります」といふやうな者があつても、けれどもさういふ者は今申す通り宗教としては成立して居らないものである。所謂俗信と名くべきものである。俗信といふのは條理が立つて居ない、譯のわからぬ所にあるものである。苟くも宗教として多少のそこに條理を立て、來れば、どうしても本尊を定めてそれを信することにならなければならぬ。

併し佛教の宗派に於ても、餘りに本尊の問題を大事に思はないで、たゞ自分の觀念であるとか、或は他の修法といふやうな事を大事に思つてやつて居るものもある。禪宗の如き本尊を大切にしない宗旨もあるけれども、それは嚴格なる意味に於てやはり宗教の未成品である。それ故に禪宗でも因つて、明治

以後に於て「修證義」といふものを新しく作つてこれに依つて信仰をしなければならぬといふやうなことに成り、近頃は禪宗のお寺でも本尊を大事にしなればならぬといふので、最近はお寺を新に建てるとか、寺が焼けて新しく建てるとかいふやうな場合には、釋迦如來を本尊にしなければならぬといふことを宗會に於て決議したと聞いて居るのであるが、だん／＼禪宗でもその缺點を自覺して御本尊の大事な方へと近づいては參つた譯である。

左様な譯で御本尊を大切にして信仰を立てるといふことが最も正しい意味であるが、日蓮聖人の宗旨の建立はその點が又洵に良く出來て居るのである。それは新尼鈔といふ御遺文に、
但し大尼御前の御本尊の御事仰せ遣はされて思ひ煩ひて候、其の故は此の御本尊は天竺より漢土へ渡り候ひし、數の三歳、漢土より月氏へ入り候ひし人々の御中にも記し置せ給はず、西域

まさす。(一〇九頁)

慈恩傳、傳燈錄等の書共を開き見候へば、五天竺の諸國の寺々の本尊を皆記し盡して渡す、又漢土より日本へ渡る聖人、日域より漢土に入る賢者等、記されて候寺々の御本尊皆勘へ盡す、日本最初の寺元興寺、四天王寺等の無量の寺々の本尊、日本記と申す文より始めて、多くの日記に残り無く註して候へば、其の寺々の御本尊又隠れ無し、其の中には此の本尊は敢ておはしませず。(一〇九頁)

と書かれて、いろ／＼の御本尊を皆勘へ盡すと仰せられて居る。天竺のお寺にある御本尊も書物に書いてある、慈恩傳とか傳燈錄とかいふやうな書物を抜けて見れば、玄奘三藏あたりが遊歴をして、その自分の參詣した寺々の本尊を記載せられて居るから、どういふ御本尊があつたといふことはわかる。支那の寺々の本尊も日本の寺々の本尊も調べようとするば皆わかるが、それ等を残らず考察を遂げて、而し

て日蓮は自分の主張する本尊を光顯したと言つてゐる。然るに日蓮聖人は自分が現はすやうな意味の本尊が他の寺々に無いといふ意味が説かれて居る、それはどういふ御本尊であるかと言へば、別に日蓮聖人の御本尊が變つて居る譯ではない、他のお寺にもある所のお釋迦様の尊い意味を顯されたのであるが、そのお釋迦様に對するところの意味合が違つて居る。他はお釋迦様を軽く考へて居る爲にそこに日蓮聖人の本尊が違ふといふことを言はれたのである。

その事が觀心本尊鈔を見ると最も能くわかるのである、佛教の全體に通じて御本尊といふものを考へたならば、お釋迦様が御本尊に相違ないのである。一切經の上で見ても華嚴經も釋尊中心であるし、阿含經は無論のこと、法華經も涅槃經も般若經も皆釋尊中心である。たゞ方等部の或る部分的の小さいお經には釋尊を忘れたやうに見える所はあるけれど

も、併ながら權大乘の諸經と雖も教主として釋尊を戴かないものは無いのであるから、往いて考へれば一切經何處を見ても釋尊中心の佛教であることは非常に明瞭なことである。

さうして又滅後佛教信仰の發展を考へると、大體に釋尊が涅槃せられた場合に佛教の信仰が勃然として起つたのは、釋尊に對するところの渴仰の心である。即ち自我偏に説いてある通りに「衆は我が滅度を見て戀慕渴仰の心を生じ」とある、釋尊の涅槃に遭遇して燃え立つやうな信念の起つたのは、お釋迦様を慕ふところの釋尊追慕の信念である。それがいろ／＼の形に變つて現れて來るけれども、皆釋尊を中心にしたる信仰であつたのである。お經が有難いと言つたところが、釋尊の説かれたお經としてそれは有難く思ふのである。靈地參拜にしても、釋尊の成道の靈地である、涅槃の靈地であるといふので、釋尊を憶れるから靈蹟參拜といふことも起るのである。

れに違つたといふのは淨土宗が阿彌陀を出したのと、眞言が大日を出したとけて、餘の佛教各宗は皆お釋迦様である。

斯の如くにして釋尊を中心とする思想といふものは異論のあるべきものではないから、近來佛教徒が眼覺めて來た時分に、釋尊の降誕會といふものを行ふが、これはモウ佛教徒全體が世界的に釋尊の降誕會をお祭りするといふことになつて、宗派の異同を問はずしてやることになつて居るのである。釋尊中心思想といふものはこれは佛教として當然な事である。佛教を信すると言ひながらお藥師様であるとか、阿彌陀様であるとか、觀音様であるとかいふのは、これは所謂俗信の間違つた思想から來たものであつて、常理立つた系統から言へば釋尊中心に反對すべきものではない。どういふ譯か、南無阿彌陀佛といふやうな事が言ひ良かつたものか、誰でも口を開けばナンマイダーとやつて居るのであるが、それ

る。或は佛舍利の信仰と言つても、釋尊を憶れるから、佛様の遺骨の一片でもやはりこれがお釋迦様の法身の一部かと思つて舍利の信仰といふものがあるのである。だから佛滅後の佛教信仰と言つても、その大部分を綜合すれば皆釋尊に對するところの渴仰である。又廣く佛教の歴史の事實上遺つて居るものを見ても、印度に於ける靈地も殆ど釋尊に關係しないものは無い、皆釋尊に關係したことがいろ／＼な美術藝術となつて遺つて居るのである。支那に於ても澤山立派な佛像が石にも刻んであれば大きな彫刻も遺つて居るが、大體釋尊のお相である。朝鮮に來ても大事な佛像といふものは皆釋尊である。左様な譯で日本に來ても大體宗旨の方で分ければ、華嚴宗等といつても盧遮那佛といふのはお釋迦様である、奈良の大佛様と言つても本當はお釋迦様である。又法相宗、三論宗、俱舍宗、成實宗、律宗、殘らずお釋迦様である。天台宗も禪宗もお釋迦様である。そ

は餘りに不用意な間違ひである。お釋迦様を除外して南無阿彌陀佛といふやうなことを餘り盛に言ひ過ぎたといふことは、これが非常に佛教の禍ひであつたから、日蓮聖人は敢然として起つてこの誤謬を矯正しようとしたものである。そこでこれが正面衝突をしたのである。どうしても佛教は釋尊中心の思想でなければならぬ。

所が觀心本尊鈔を見るときいふと、いろ／＼書いてあるやうだけれども、要するに今の事柄を記されて居るのであつて、殆ど釋尊中心といふことには異存が無いのである。

正像二千年の間は小乗の釋尊は迦葉阿難を脇士と爲し、權大乘并に涅槃法華經の述門等の釋尊は文珠普賢等を以て脇士と爲す、此等の佛を正像に造り畫けども未だ壽量の佛有しませず、末法に來入して始めて此の佛像出現せしむべきか、同ふ、正像二千年の間は四依の菩薩并に

人師等、餘佛、小乘、權大乘、爾前、迹門の釋尊等の寺塔を建立すれども、本門壽量品の本尊并に四大菩薩をば三國の王臣俱に未だ之を崇重せざる由之を申す。(九四〇頁)

斯うある、これは洵に明瞭なことで、正法千年、像法千年の間にそれ等の人達が大切にされたのもやはりお釋迦様である。たゞ臨土が迦葉尊者、阿難尊者を臨土にして居るお釋迦様、或は文殊普賢を臨土にして居るお釋迦様である。末法に來つては本化の菩薩を臨土にしたお釋迦様でなければならぬといふことを言はれて、即ち「本門壽量品の本尊並に四大菩薩を三國の王臣俱に未だ之を崇重せず」、この場合の本門壽量品の本尊といふのはお釋迦様である、その前の所にある「壽量品の本尊」と書いてあるのも同じことである。左もなければ「并に四大菩薩」といふ語が成立たない。これが曼荼羅であれば「并に四大菩薩」とは言はない、曼荼羅の中に四大菩薩

が入つてしまふ。されば「壽量品の本尊」とは釋尊である、さうすればお釋迦様を有難く思ふ考へ方を良くしなければならぬといふことである。

その意味は開目鈔の方と對照すれば頗る明瞭になつて來るのである。開目鈔の方に於ては、天台宗より外の諸宗は本尊にまでえり。

と書かれて、俱舍、成實、律宗等はやはり釋尊を本尊と思つて居るけれども、その意味がちやうど天子様の太子が自分の親は百姓だと思つて居るやうなものであると言はれる。これは何を意味するかといふとお釋迦様を天子様のやうに大切にしなければならぬのであるのに、民百姓の如き意味に於て釋尊を崇めて居る、その他華嚴宗、眞言宗、三論、法相等の諸宗に於ても、三論、法相がお釋迦様を本尊としたのは、我が父を侍と思ふほどの意味になつて居つて、やはり釋尊の天子様ほどの尊さの意味を了解し

(七九二頁)

て居らない、華嚴宗と眞言宗とは少し横へ拗けて行つて、華嚴宗は盧遮那佛といふ大佛を——それは本來お釋迦様であるのを、違つた佛のやうに考へた、その考は行つたり戻つたりして居る。華嚴宗の盧遮那佛は無論お釋迦様を大きく見たのであるけれども、それがお釋迦様と盧遮那佛とを別なやうに考へかけた、そこに非常に悪い考があるのである。弘法大師はもと華嚴の人で行つたり戻つたりして居つた、ところが面倒で仕様がなないので、今度は大日如来といふものを擔出して、さうしてお釋迦様と大日はさういふまやかしの議論であるから「天子たる父を下して種姓もなき者の法王のごとくなるにつけり」と言はれて、ちやうど將門式思想であつて、實にこれは悪い事である。お釋迦様に貶を付けて、お釋迦様以外にえらいものがあるといふことを言ひ出したのは間違つて居る。又淨土宗はお釋迦様の分

身である、お釋迦様の身を分けて働いて居る枝葉である阿彌陀を以て有縁とし、これを大事にしてお釋迦様を捨て、居る。禪宗は成上り者が親を粗末にするが如く、子供が錢を儲けたら親を粗末にするやうな意味で、僅かの佛法修行の爲に佛を侮辱するやうな事を言ふ、これ等は皆本尊に迷つて居るものである。ちやうど支那に於て三皇已前は父を知らざりしが如くに、これ等は皆壽量品の釋尊の尊さを知らざるものであるから不知恩のものである。斯う論じてある、この「壽量品を知らざる學者は不知恩の者」といふことも、本尊鈔の「壽量品の本尊を崇重せず」といふことも皆同じ系統の思想である。されば本尊鈔に於てもやはりお釋迦様に就て論じてある譯である。

ちやうど日本に於ては、皇室の尊嚴を明かにしなければ日本の國民道徳といふものは明かにならぬ。徳川時代の思想ではさういふ事を麻味にして、

さうして皇室の尊嚴は隠れて居つた。明治維新の大業に依つて皇室の尊嚴を明かにしてその思想が開明になつた時、そこに日本の國體も明かになり、國民道徳も立ち、随つて國家の隆盛もそこから力を得て進んで來たのである。それ故に佛教の本旨を明かにし、佛教の隆盛を來し、將來佛教が復活活動を起すといふことに就ても、釋尊中心の思想を明瞭に決定せざる限りには、何時まで行つても佛教は蛇の生殺しみたやうなもので、蘇へるものではない。けれどもさういふ宗派に居る者はそれで飯を食つて居るのであるから、なか／＼容易に改めない、故にさういふものに關係の無い者が判斷して、所謂輿論といふものがこれを判斷して佛教の取捨をしなければならぬものである。その方で飯を食つて居る坊主の言ふことを聽いて、その者がわかるまで待つて居るといふことであつたならば、何時まで經つても佛教といふものはわかるものではない。そこで日蓮聖人の立

正安國論が起つて、さういふ者に對して布施をする者は地獄に墮ちるとまで鐵槌を下された譯である。その思想はどうしても關聯して起つて來なければならぬものである。

日蓮門下にして本尊のことをきめずして、何を拜んでも南無妙法蓮華經と言つてさへ居れば法華だといふやうなことは實に悪い思想である。それはちやうど「萬歳」とさへ言つて居れば何でも宜いといふやうなものである。「天皇陛下萬歳」と唱へてこそ萬歳に價値があるのである。無暗矢鏝に萬歳を澤山唱へたら宜いと思つて、「親父萬歳」、「禿頭萬歳」、「臺所萬歳」、終ひには「下足番萬歳」まで行かなければならぬやうに思つて、「萬歳々々」とやつて居る、さういふ風に行けばだん／＼萬歳の價値といふものは無くなつてしまふ。今の法華宗の南無妙法蓮華經などはカフエーに行つて女給の尻を拜んで「萬歳」と言つて居るやうな譯であつて、洵にお題目を粗末に

使つて居る。南無妙法蓮華經は絕對本佛に對する信解の告白でなければならぬ、萬歳の聲は「天皇陛下萬歳」でなければならぬ、皇后陛下萬歳といふことも言はないで宜いことである。二つ言ふ人もあるけれども、本當の大事な儀式になれば一つであつて、兩陛下お並びになつて居つても「天皇陛下萬歳」一つで宜いのである。その如くにやはり佛教の内部に於ても、この釋尊に對する絕對の尊信を捧げて行くことが明かにならなければ、信仰も確立せず、その信仰から起るところの活動力といふものも決して旺盛にはなつて來ないものである。

それ故に本尊鈔に於てはこの意味を愈々明瞭にせられて、

此の時地涌千界出現して本門の釋尊の脇士と爲り、一闍浮提第一の本尊此の國に立つべし。

(釋九四八頁)

はれて居るものは上行等の菩薩が脇士になつた釋尊である。この脇士といふことは此處では非常に喧しく論じてあるが、これは形に現して木像にでもする時には、たゞお釋迦様一體であつてはごういふ意味でこれを尊信して居るかといふことがわからぬから、上行等の菩薩をお側に附けて置けば、モウ壽量品の顯本したる絕對本佛であるといふことが形式上に於てわかるから、この本化の脇士といふことを喧しく言はれるのである。その事を意識してしまつたならば、何も脇士が無くとも宜いのである。自分が眼を瞑つて實在の本佛に對する時分には、お側に上行等の菩薩が居られようが居なからうが、さういふことに依つて本佛の價値が違ふものではない。その意味は日眼女釋迦佛供養鈔の如きに至つたならば、本化の菩薩もそれ等は皆釋尊の分身である、釋尊の御活動であるといふことになつて、絕對本佛の場合には脇士などは最早や論ずる必要がないのである。

又開目鈔に於ても天の一月萬水に浮ぶといふ時分には、その萬水に浮ぶ中の一つに本化の菩薩なども入つてしまふべきものである。

斯様にして一闍浮提第一の本尊といふのは、本門の釋尊、それを絶対の尊さの意味に考へさへしたならば宜しいといふことが論結されて居るのが本尊鈔である。

斯の如く前には「本門壽量品の本尊」と言ひ又此處に「本門の釋尊の脇士と爲り、一闍浮提第一の本尊此の國に立つべし」と言はれた。この釋尊を以て一闍浮提第一の本尊とせられて居るといふことが明かになれば、この思想が開目鈔ともその他の遺文とも皆疏通して來るのである。私はこの意味に於ても本尊鈔も開目鈔も報恩鈔もその他の遺文も皆な一つになつて居ると思ふのである、開目鈔ではお釋迦様が非常にえらくして、本尊鈔では南無妙法蓮華經の方がえらくなるといふやうなことは決して無い、本

さうしてその本尊の立證といふものは法華經に基かなければならぬものである。その事はやはり新尼鈔に於ても、

人疑ふて云く、經論におはしまさねばこそ若干の賢者等は、畫像にも書さ、木像にも造り奉らざらめと云々、而れ共經文眼前也。(一〇九〇頁)

と書かれて、今更でにさういふ御本尊が無いといふ非難に對しては日蓮聖人はそれに答へて「而れ共經文眼前也」お經文に明瞭であるから、今までの人がやらなくともそれを非難する理由はないと言つてある。經文眼前なりといふのは即ち「壽量品の本尊」と言はれて居つて、壽量品に基いて日蓮聖人が本尊を光顯したのが正統思想である。壽量品は曼荼羅式になつて居るのではない、題目中心の思想になつて居る譯ではない、今の醫者と藥の關係に於てハツキリ説明せられて居るのであるから、本尊鈔の法文に説かれて居るが如くに、佛の大慈悲より起つて

尊鈔に於てもお釋迦様と南無妙法蓮華經との關係は頗る明瞭に説かれて居る。即ち

今の遣使還告は地涌なり、是好良藥は壽量品の肝要、妙體宗用教の南無妙法蓮華經是れ也。(九四四頁)

とあつて、この是好良藥の南無妙法蓮華經といふことは、即ち壽量品に於てお醫者が藥を拵へて病人に與へたその藥である、その良き醫者といふのは本佛釋尊である、使を遣はす使は本化の菩薩であるといふことになつて居つて、少しもこの意味合に於ては釋尊と題目との間に衝突もなければ横切の所も無い、壽量品の經文にあるが如くに、即ち醫者と藥の關係である。それ故に本尊鈔の末文にも「佛大悲を起して妙法五字の袋の内に此の珠を裹みて」と仰せられて、佛の大慈悲より事が起つて南無妙法蓮華經の有難さがそこに説かれて居るのである。皆佛様の御力である。

妙法の袋の内にその功德を込めてお與へになつたといふこの解釋が宜しいのである。

即ち醫者と病人の間にそこに藥が起る、これは併し樂でない場合もある譯である、マツナージのやうな方法でも行けるのである、その救濟の力といふものは本佛の絶対の力をお有ちになつて居る。併しこの娑婆世界の衆生を救ふには法を説くが宜し、説いた法を纏めて信仰に移すが宜いといふので、擣き糞ひ和合して五字の題目とせられたものである。その救濟の方法は譬喩品あたりに依つて見てもそれは絶対の力を有つて居られるのであるから、「我は身手に力有り、當に衣袂を以つてや」といふことがあつて、この教を與へられることは即ち救濟の方法から出て居るものである。教を受け容れることの出来ない者も救はれる場合があるのである、即ちそれは先づ人間の中で言へば啞であるとか聾であるとかいふやうな者に對してこれを善化する場合に於ては別な方法

に依らなければならぬ。或は人間以下になつて地獄、餓鬼、畜生の境界に墮ちてしまへば説法教化をすることは出来ない、神通不思議の如來秘密神通の力は、如何なる方法を以て彼等惡道の者を御濟度になるかも知れないのであつて、佛力不可思議の絶対の力の中から娑婆世界の衆生濟度の爲に一切經をも説き、是好良藥の題目をも留め、救濟の方法としてこれを遣されたに過ぎないものである。絶対の力は常に本佛に有し給ふといふことを信じなければならぬのである。

その解釋が逆に行つて居るのはどうしても「經文眼前なり」と言ふ譯には行かない、經文にその通り説いてある、壽量品を讀んで見たならば本佛の絶対の力を説かれたものである、その如來秘密神通の力といふ文字が絶対であるとかいふやうなことは何も説いてあるのではない。如來秘密神通の力であり、如來壽量品である、何の迷ふ所も無い、佛様の尊い

ふ絶対の主師親、即ち吾々の魂の方から考へたところの魂の親、魂の御主人といふものを求めるのである、一時の人間に生れて居る部分的の肉體に就てはそれは親もあり、主人もあり、師匠もあらうけれども、その自分の絶対の自己であるところの無限の魂、死んでも死なないところの無限の魂、そのもの、親、そのもの、師匠、そのもの、主人、といふものを尋ねたる時、そこに絶対本佛の尊さが現れて來る譯である、これを説いたものが法華經である。その時分にさういふ温かなる親であり、お師匠様であり御主人である尊とい主師親の御佛を忘れて、文字が有難いの、語が有難いのと言つてまごつたところ、が仕方がない話である、それは迷ひ深しと言はなければならぬ。それは眞言風の思想といふか、婆羅門風の思想といふか、思根の迷ひの爲にさういふ言語や文字の絶対を認めて大人格者の尊さを忘れるやうな系統になつて來たのである。併し日蓮聖人がさう

事を絶対に説かれたものが壽量品であるといふことに就て、何のそこに議論があるか。

その意味から考へて行けばこれが開目鈔に移つて來てもハツキリと思が一致するので、開目鈔の冒頭にあるところの吾々が信仰を捧げるものは絶対の大人格者に向はなければならぬ、「所謂主師親」とあつて、即ち御主人であり、御師匠様であり、親であるといふやうな温かな人格を有つた一番えらい方を尊信しなければならぬといふのである。決して文字でもなければ理窟でもない、實相の妙理を指して主師親の三徳者とは言はない、如何に妙法蓮華經の語尊しと雖も、文字を指して主師親三徳者とは言はない、絶対の本佛大人格者に於て主師親三徳といふことが言へるのであるから、「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり、所謂主師親これなり」といふ總標の意味よりしてこれを見て行くならば、そんな思想が紛れ込んで來る餘地は無い譯である。宗教はさうい

ではなかつたといふことは、開目鈔の卷頭第一、即ち「主師親これなり」と仰せられた所に明瞭なことである。

さうしてその開目鈔の内容を見れば、即ち壽量品の本の本佛を顯はして、さうしてこの壽量品の佛が天月である。「壽量品の佛の天月しばらく影を大小の器に浮べ給ふを」と言つて、洵に明瞭にいろ／＼に身を分けておはたらきになつても、その根本は壽量品に於て顯したところのお釋迦様であるといふことをお示しになり、そのお釋迦様の尊さを事細かに論證せられたのである。さうしてそれが即ち本尊である。「尊敬すべき」といふ尊敬を捧げるものが本尊である。故に開目鈔を讀んで參れば自然釋尊が本尊であることは明かである。前に擧げた即ち他の宗旨が釋尊を軽く視て居るのは本尊に迷うて居ると言はれた開目鈔の意味は、明かに釋尊を以て本尊としてお在でなされることは明瞭過ぎるくらゐ明瞭なことであ

それがたゞ開目鈔には限らない、一轉して報恩鈔に行つて見ると、報恩鈔にも有名な文で、殆ど誰しも諳んじて居るほどに釋尊を本尊とすることが説かれて居る譯である、それは報恩鈔の終ひの所に三大秘法を論せられてハツキリと書かれて居る。

問うて云く天台傳教の弘通し給はざる正法ありや、答て云く有り、求めて云く何物ぞや、答て云く三つあり、末法のために佛留め置き給ふ迦葉阿難等馬鳴龍樹等天台傳教等の弘通せさせ給はざる正法なり、求めて云く其の形貌如何、答て云く一には日本乃至一闍浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし、所謂寶塔の内の釋迦多寶外の諸佛並に上行等の四菩薩居士となるべし、二には本門の戒壇、三には日本乃至漢土月氏一闍浮提に人ごとに有智無智をきはらず、一同に他事をすて、南無妙法蓮華經と唱ふべし。

の受話器を耳に當てれば直ぐ響いて來て、こつちが「モシ〜」と言へば「ハイ」と言つて出て來るものは誰かと言へば、向ふの相手はお釋迦様である。南無妙法蓮華經を通してその受話器の所に掛つてチリン〜「モシ〜」と言つたならば、「ハイ」と言つて何時でも汝の前に立つて感應をするぞといふことを約束せられた。ちようど電話を家に掛けて置いて受話器があるやうなものであるから、そのお釋迦様のお眼に感らうと思へば、南無妙法蓮華經と信念せよといふことになつて居る。併し電氣が切れてしまつたら駄目である、兩方に電氣が通うて、即ちこららの信念といふものとお釋迦様の大慈悲との電氣が通うて、南無妙法蓮華經が活きて居るのである。それがなしにたゞ御本尊を軸として古道具屋に掛けて賣つて居る、「二十錢に負ける」いや三十錢でなければ賣らぬ」と言つて居る間は何でもないたゞの紙である。それを買つてお祀りしてこちらが信念を加へ、その

この場合には御本尊は釋尊である、南無妙法蓮華經は唱へるのである、此處が大事な所である、必ず南無妙法蓮華經と言つたら唱ふべしといふことがあつた。これは難しい理窟でも何でも無い、南無妙法蓮華經は五字七字の唱へ言葉としてこれを受持して行くのである。その中に釋尊の廣大なる力が籠つて吾等を救はれるのであつて、南無妙法蓮華經はそれだけの價値のもので宜いのである、聲であり文字であつて宜いのである。だから五字七字とか或は一遍とか言ふ、口で言へば一片、字で言へば五字七字である、理窟ではない、たゞ南無妙法蓮華經と唱ふべしである。その南無妙法蓮華經の中に我が信心する佛様の廣大無邊の御力、御功德、御慈悲、一切の佛のものが籠つて我等に與へられるので、屢々申す通り南無妙法蓮華經はちようど電話線みたやうなものである。或は電話の受話器のやうなものである、そ

奥に活ける本佛が在しなして始めて南無妙法蓮華經が活きて來るのである。さういふ宗教でなければならぬ、これからの宗教は今までのやうに護符などと言つて紙に字を書いて貰つて有難がるといふやうに、少しも人格を認めずしてやつたのはそれは低級な宗教である。さういふものは今後は存在しないものである。今のザラツペンにやつて居る雑炊法華といふやうな宗教は非常な低級なものである、依り所は法華經と言ふけれども、たゞ法華經にくつ附いて居る寄生虫であつて、何でもないのである。絶對の本佛を意識すれば即ち日蓮聖人の仰せられた如くに、寺々の本尊を勘へ盡す、その中に於てこの尊き佛は在まさないといふことになつて、三國のあらゆる寺々の本尊よりも、一切の宗教の本尊よりも超越したる尊きものが現れて來る。その事は洵に明瞭に報恩鈔にも「本門の教主釋尊を本尊とすべし」と仰せられて居るのである。

安國論の方に於ては「弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ」とあつて、これは直ちに本尊とは言うてないけれども、日蓮聖人の精神を支配して居るものは「一佛の子」といふので、我が父本佛、その尊き佛様の愛子として、さうして結構なる法華經を奉じて居るのである。この佛様の仕事をお手傳ひしなければならぬといふので護法の活動が起つて參る譯である。だから安國論の中を見ても明かに釋尊に對する觀念である。さうして安國論の所破となつて居る法然の撰集を攻撃せられて居るのも、彼が阿彌陀如來を尊信して釋尊を忘れることに於てこれを非難せられて居るのである。

撰時鈔の方に於ては本尊のことに直接縁のあることは少ないやうであるけれども、少しこれに關係した語はある、やはり眞言に關する文章の所に、

釋迦如來の佛法をばいかなるものかうしなうべし。
(一三三九頁)

へ飛込むよりも困難なことであるが、それが今日まで無事で来たといふものは、靈山淨土の教主釋尊を始めとして御守護下さつて居るからしてこの仕事が出来たのである。即ち日蓮聖人の信仰を捧げてござるものは教主釋尊である。本尊といふのはたゞ字で書いたり、木像で祀つたりする時だけが本尊ではない、二六時中その人の信念がそこに向いて居り、信仰の相手になつて居るものが本尊である。日蓮聖人がこれ等の釋尊の守護なければ「一時一日も安穩なるべしや」と言はれて、一日でも一時でも安穩なすことは出来なかつたのを、今日まで無事であつて居るのはそのお釋迦様の御守護に依つて日蓮が無事安泰に來たのであるといふ感謝の語を釋尊に捧げて居られる所を見れば、即ち日蓮聖人の心中の本尊である。祀つた本尊だけ考へて居るからいかに、それは祀るのも結構だけれども、さういふ形を離れて、行住坐臥自分の心の對照となるべき本尊でなければならぬ、

と書かれて「釋迦如來の佛法」といふことを此處にはお書きになつて居るが、その少し次の所にも

釋迦の佛法をば失ふべからず。(一三三九頁)

とあつて、弘法大師が何と言はうが、佛法といふものは釋尊のものである、釋尊を蔑ろにすべき條理は決してないといふことを仰せられて居るのであるが、この思想はやはり本尊の方に移せば釋尊中心の思想である。又撰時鈔の終ひの所に、

裸形にして大火に入るはやすし、須彌を手にとつてなげんはやすし、大石を負うて大海をわたらんはやすし、日本國にして此法門を立てんは大事なるべし、靈山淨土の教主釋尊實淨世界の多寶佛十方分身の諸佛地涌千界の菩薩等、梵釋日月四天等冥に加し顯に助け給はずば一時一日も安穩なるべしや。(一三四九頁)

これが撰時鈔の結文であるが、日蓮が法華經の弘通をすることは困難なることであつて、裸體で火の中

らぬ、いろ／＼飾り立てをして、自分の家に幕を張つたり、燈明を上げたり、密相を上げたりして居る本尊でなければ役立たぬといふ風なことは、それは一つのさういふ事に依つて自分の信念を刺戟するのであるけれども、だん／＼善い信心になれば密相を見て信心するとか、燈明を見て信心するとかいふことはそれはおかしげな話である、さういふ風に祀つてあるから大變にあらたかだといふ、さういふものではない。モウそんなものは何も取つてしまつて絶対の本佛を實在の儘自分の心にこれを憶れて、佛様は自由自在だから、吾々のやうに大地を踏んで立たなければならぬことはない、雲の上でも何處でも自由であるから、信心すればちやんとそこにごさる考へて信念を捧げて行けば宜いのである。そのやうに心に信するものが本當の大事な御本尊であると思ふのである。

又日蓮聖人が三箇の高名と言つて、三たび國家を

諫められたことを自分自ら高名と言つて居られるが、その大事な事を言ひ表はす場合にもやはり釋尊を呼んで居るのである、それは、

此の三つの大事は日蓮が申したるにはあらず、只偏に釋迦如來の御神、我身に入りかわせ給ひけるにや、我が身ながらも悦び身にあまる。

(一三四頁遺)

とある。立正安國論を捧呈し、その後二度國家諫曉の大事をやつたが、その生命に代へて國を諫めるこの勇ましき行爲は日蓮の力ではなかつた、お釋迦様の神が日蓮に入り代らせ給うたのであるといふことから、斯ういふ工合に活きた人格の佛を憶れて、それを信仰の對照にして居らるのである。空中にピカッと題目が光つたとか随分昔からいろ／＼な事を言ふ、日蓮聖人が佐渡に流される時分でも、權を以て波の上に字を書かれたら南無妙法蓮華經が金の字になつてフワ／＼と浮いたとか、それから鮑の貝

の中に南無妙法蓮華經といふ字が出て居る、これが船底の穴の開いた所へくつ附いたのだと言つて、鮑の貝を「これが三十圓だ」、「五十圓だ」と言つて今でも賣つて居る。そんなものはチョット藥を附けて火で炙れば鮑の貝にどんな字でも出て来る、毎日五百枚でも千枚でも出来る、さういふ風なことは中途から随分やつたものである、日蓮聖人滅後六百五十年になるから、その間にはいろ／＼企みをしてつゞらぬ事をやる者があつた。今もさういふ事に依つて錢儲けをしようとする者があるけれども、昔もさういふ坊さんや信者が居つたものである。そんな者は何をやつて居つても役に立つものではない、本當の筋立つた教に基いて判斷して行かなければならぬものである。

日蓮聖人は何時でも釋尊を呼んで居られるのである、即ち安國論に於て言へば「弟子一佛の子と生れ」と言はれる、そこがチャント頭に來なければい

の思想といふものは互に共通して決して相反するものでないといふことを認めなければならぬと思ふ。私はこの解釋に於て少しも無理はない、それが疏通せられてさういふ考で見て行くのが本當の日蓮聖人の御趣意であると思ふ。——(次號完了)——

かぬ。今撰時鈔に於ても「釋迦如來の御神、我身に入りかわせ給ひけるにや」これが日蓮聖人の眞精神である、「そこだ」といふことがピンと響くやうに一切の僧俗を造り上げなければ、今までのやうなガラ／＼した法門では駄目ナンである。そんな事をやつて居つたから徳川時代に念佛宗に負けてしまつた、向ふは一本槍で何でも構はない、阿彌陀様で押切つて居る、こつちは狐や狸を拜んで居りながら惡口ばかり言つて居る、然らば自分の信心するのは何かと言つたならば、帝釋様であるとか鬼子母神様であるとかいふやうなことをやつて居る、それぢやサツパリ駄目である。全體さういふやうな天部以下のものを以て佛教の信仰の對手とすべきものではない、それは六道流轉と言つて、六道の辻に彷徨うて居るものである。

そこで本尊鈔の思想も結局釋尊中心であつて、開目鈔、安國論、報恩鈔、撰時鈔、何れも釋尊中心

汝諸人等は皆是れ吾子なり、我は則ち是れ父な

り、汝等累劫に衆苦に焼かる、我れ皆濟拔して

三界を出でしむ。

天風三萬里紀行 (其二)

四〇

文部省囑託 小林 日種

四月十三日

午前九時、久保秀蝶、長谷川淨進、村上日磨、安藤乾函、宇山角次、外二三氏に見送られて名残り惜しくも出發した。

平壤は夜であつたので驛を見たばかり、安東でまだ夜があけず、鴨綠江は黒く見えたばかり税關検査も呆氣なくすんだので又一ねむり。

四月十四日

拂曉、鶏冠山驛を過ぎ、纏て文字その儘の鶏冠山を曉靄の裡に仰望し、潺湲として山麓を走る清冽冷涼の鶏冠川を俯看するに及んでは睡臉、一時に爽かにして神氣忽ち快然たるを覺えた。

猶は驚くべき事は、山野處々、殘雪有りて吹く風寒冷を極め、沿道の圪柳枯木に似て春を知らず、點在する農家の炊煙凍りて糸の如く満目荒涼たるを覺え、余は思はず外套の毛皮の襟をたてた。

奉天に着いたのは八時であつた。

支那の風物、一として物珍らしからぬはない。驛の賣店が特別待合室で、そして食堂を兼ねてゐるし天井まで届く大きな戸棚の中に酒類や名産糖果の罐などがギツシリ詰められてゐるかと思ふと、なまなましい梅の古木を書いた大きな花瓶や、ケバクしい五彩の皿や、鑄物の佛像、紫檀、翡翠、玉、硯等のいろ／＼な色彩が、にせ物らしいうす笑ひを浮べて棚の上で光つてゐる。午前九時發の大連行きに乗つた。此邊の自づから風物の異なるものあり、驚いた事には沿道の圪柳髪のように延び、フト見れば、車井の扇風機が緩い音を立て、廻つてゐた。

大石橋驛へ着いたのが一時であつた。岡松乾丈師の顔が車窓より見えた時は嬉しかつた。

其處から營口へは約三十分の行程である。

營口驛には妙光寺信徒諸氏、並びに各宗寺院諸師

等が十數名出迎えてゐて下さつた事は意外でもあり、且つ非常な喜びを感じた。驛より妙光寺に向ふ途中、滿州特有の烈風吹き荒れ、人も車も馬も皆吹き飛ばされながら歩いた。

着するや直ちに讀經し、岡松氏の挨拶有りたる後、余は「聞法と歡喜」と題して約一時間半語つた。夜は書類を整理して早く寝た。

四月十五日
岡松師の案内で、滿鐵地方事務所、領事館、警察署、滿洲新報社等を歴訪した。就中、滿洲新報社の社内を隈なく社長小川義和氏の案内で參觀した事は面白くも有り、訓へられる點が多かつた。私の主筆してゐる千葉毎日新聞なども、今後の經營方針には大なる革正を要するであらう。

夜は滿鐵社員俱樂部で講演會が開かれた。岡松師は「信仰の意義及びその價值」に就て語り余は「不景氣より脱却すべき策如何」の題下に約一時間半語つた。

四月十六日

チ、ハル迄の北行を岡松師も同行する事となつた

ので朝來その準備に忙がしかつた。

午後二時信徒諸氏十數名に見送られて出發した。大石橋に着いたのが二時半、滿鐵社會課より出迎えてゐて下さつて、直ちに驛前朝日館に案内されて寛ろいだ。

主人小林才治氏は、長く千葉驛の驛長を勤めてゐた人で余を歡待する事頗る丁重を極め非常な愉快を覺えた。夜は滿鐵社員俱樂部樓上にて『一步前に出でよ』の題下で二時間餘の講演をなし、歸來、新聞記者二三氏と會談して寝たのが一時を過ぎてゐた。

四月十七日

いよいよ北行すべく朝七時、長春行列車に乗り込んだ。鞍山驛から見える、周圍の鐵の山。遼陽驛から見える、黒い豚の群れ、そして所々に見る、何師團激戦の地、何中隊長戦死の地。

奉天で瀋車を撫順行に乗り換え約二時間、撫順に着いた。

驛に、高宮惠泉師、前田 氏の二君が莞爾として出迎えてゐて下さつた。

自動車にて高宮師のお寺に行き、次いで旅館撫順ホテルに投じた。

知法思國會第二回教化大講演會

梅雨らしい長雨もなく連日の旱天続きで地も空も人も家も悉く乾ききつた暑いあつい七月十七日まだこれよりもあつい護法護國の熱に炎へてゐる知法思國會は教化大講演會を帝國在郷軍人會淺草區分會並に淺草區青年團後援のもとに夜七時から淺草區役所樓上の公會堂に於て開催された。本會は時間勵行が評判であるから定刻前三四十分より來聴は見へた。堂々たる大講堂に白扇は翻々として急がしさに其数は次第に増して來た己に盛況知るべしである。

開會の辭として淺草在郷軍人會長向山軍二郎氏壇上に現はれ知法思國會が現在の社會に對して最も有意義の會であることに共鳴し本會は進んで之を援助し以て國難切迫の今日國民は速に覺醒せねばならぬと説き今夕の各講師の名義紹介をされた。

大僧正本多親下は御健康悉く御恢復でなく而も此日午後自房に於ける孟蘭盆施餓鬼大會を嚴修されて少憩の暇もなく急遽御臨席遊ばされ約四十分間「我國の精神文化に就て」と題し御講演になつた概要は左の通り

我國精神文化の發揚が本會の目的であります、國民が其國にあつた大切な精神文化に疑ひ惑ひをおこすやうになつて其心が動搖を來たし確固たる考の失せた時には、夫れは其

ば治らない、實にイヤなものと察する、處が今日の日本人は少し眉毛が抜けかけて居る、夫は哲學や宗教を無視した時に招く病である。國民が精神文化に力を失つた時其國は眞に危い。今日は經濟戦あり思想戦もあるが、思想の争が最も大事である、經濟の方は直ぐわかるが、精神の方は三年五年でも分り難い。我愛國の士はかく迄になつて居るのに精神文化を思はないのは國家を慮はざるものであらねばならぬ。日本文化は實に世界最高のものを持つて居る、此精神文化あるが故に大和魂は磨きあげらる。何を榮養として此大和魂が磨かれたかそれは哲學道德宗教でないか、これは世界の何處にもない、西洋の倫理打算的高利的なものとは較べものにならぬ。前年佐久間大尉が潛航艇沈没に際し「各員は其任務を完全に盡し終つたがさて、陛下に申譯ない」と手記されてゐた事を西洋人が見聞して自分が立派に義務を竭してあり乍ら申譯ない事である、すまぬとはどうした矛盾か其意味が解らぬといふ、此解らぬ處に彼等の道德の低いといふ事を語つてゐる。之を家庭に於ける夫婦に見ても國家に對する國民としても何處に新様な立派な國民性がありませう。(幾多の實例の列挙あり)。哲學はどうか、マルタスの唯物史觀などは哲學上で一返に打壊れる、扇子一本で解決はつく。吾國では第一に靈魂の貴い事と此魂は永存し、而も佛様と同様である事を信ずる、天地宇宙

國家の滅亡を物語るもので、あると古聖の名句を引證された、今や東京だけの現状を見ても道路は廣くなり、銀座を歩いて日本は勢よく發達してゐるやうに見ゆる、他面には山や海に遊びに行く人が澤山で、實に元氣盛んに見ゆるが、一步立入つて精神の側を見ると、とてもお話にはならぬ。其人等は哲學的にも道德上にも宗教に於ても何等の觀念は持たさぬ、フランテンの國民であり全くたよりないだらしない國民と云はねばならぬ。吾の人は丁度忠臣蔵の由良さんみたいナとひよろ付いてゐるやうでも其心は凛然として道義の念は堅固であつた。現代はあまりにグデンと

がひどい魂の底の底まで腐つては困る。

日蓮聖人は「五逆ハ霍亂の如シ、急ニシテ事ヲ切ル、諺法は白癩病ノ如シ、始メハ緩クシテ後ニ漸々大事也」と仰られた。日々新聞三面記事は五逆が澤山に示されてゐる、女房が亭主殺しをしたとか、一寸小言をいはれたからと親殺しをする等は皆五逆である、霍亂はコレラ病である。こゝろいふものは世間が騒ぐから直ぐ問題となる。諺法は聖教や道義に従はぬ唯眼前の享樂のためにはしる、これは癩病患者のやうなものだと云はれたので此の仰は轉た感歎する。癩病は潜伏期が永い又傳染性である、乞食から傳染しても十數年は現れない、娘でもお嫁入り頃になるとソロソロ眉毛が落ちる、それ鼻がといふやうになるがさうなれ

の大生命十界久遠常住の大眞理善因善果惡因惡果の理をマルクスは知らぬ。宗教は結構で歡喜の心を生ずる、いかなる生活にでも心の落付を得て平和な心となる。此等の道德哲學宗教を失へば既に國家は滅んでをる。日本人の一番大事は國民精神の基準となる明教である。等。

次で日蓮宗教學部長加藤文雄氏は「東西文化の歸着點」に就て長廣舌あり。海軍中將佐藤華藏閣下は「所謂新思想と日本國民の本領」と題して話され最後に前獨逸大使本多熊太郎閣下の「國狀を凝視して」の有益なる時代適應の講演は時間を忘れて熱心なる聴衆はいかにも名残り惜しげに見受けたるも既に十時を過ぐる四十分。閉會に際し佐藤中將の主唱萬歳三唱に目出度散會した。

宇品灣頭に立正閣建つ

布教師紀野俊耀師は、先年萩在任中村勇吉氏の發願を扶けて山口縣大津郡三隅市に立正閣を建立し、昨年其本堂庫裡山林宅地を舉げて、總本山妙滿寺の直屬として寄附したるが全師は廣島に轉任後は更らに法鼓を未開の教田に鳴らし、就中日清戦争已來異常の發達を遂げ益々發展せんとする宇品港に着目し、毎月單身法陣を布きて權門徒の覺醒を促しつゝ、

ありしが、近時漸く其曙光を認め信徒十數名を新たに得るのみならず岩本政吉氏夫婦深く過去の邪信を悔ひ自ら改宗の實を擧ぐるのみならず、親戚數戸を改宗入信せしめ、更らに紀野師をして「釋尊に還れ」の大運動の陣地として宇品の要地に道場の建立を發願し、本月全く工事落成六月十九日盛大なる開堂入佛供養は行はれ、釋尊を正面本尊に、聖祖及法華經一部は左右に奉安され、紀野師を大導師として一同感激の裡に嚴修された、導師の慶讃文を奏上する頃は、發願主始め感激の頂天に達し、熱涙をたゝへ唱題するもの多かりき右終りて講演會に移り

今正是其時

島田憲一師
紀野俊耀師

最大の法動
慶讃文

謹而奉勸請大恩教主釋迦牟尼世尊本化上行聖祖日蓮大上人等來當道場悉知照覽あらせ給へ、茲に本日をトし發願主岩本政吉夫婦等謹で道場を新築嚴淨し、佛法の本主大聖釋尊を奉安し以て開堂の式典を修し奉る、伏して惟ふに佛教東土日本に入つて年久しく、

佛開堂を連らね八宗十宗蘭菊美を競ふて佛法の興隆を見るが如きも、悲しい哉皆唯我一人能爲救護の大恩教主たる釋尊の御親を忘れ名を佛教に籍るも心は釋尊を離れ、本尊には他佛他神を仰ぐ、恰も不孝の子父を捨て、他人を父とするが如く不臣の民皇室の尊を忘れて他國の君主に祈るに似たり、聖祖七百年の往時四大格言を絶叫して佛教徒の覺醒を促し死身弘法以て本佛の正統を傳へ給へり、信士岩本政吉夫婦先きに權門方便の信にありしも豁然釋尊本佛の大義に感孚し釋尊に還るは佛教復興の根本義佛教徒正統の信仰なるを自覺し獨り自ら信するのみならず、廣く他をして正義の信に入らしめ、教主釋尊の安穩の樂世間の樂及び涅槃の樂を共に得せしめんとして此の道場を建立し奉る、實に最大の法動と云ふべし予謹で命名して顯本法華宗旨立正闡と稱す、佛陀三寶哀愍納受の御手を垂れ、法燈長く輝きて無明の闇を滅し、法鼓永へに鳴つて廣宜流布の大願を扶け給はん事を

釋時昭和四年六月十九日

權僧都 紀野 俊耀
合掌和南

佛性の顯動

最近の事、頗る蒸し暑い日であつたが、年若い一婦人が大阪生玉の堂閤寺を訪づれ立正結社に入會を申込まれた上、語らるゝやう「私は東京に居ました時はよく統一閣に通ひ又當地に移つてからも屢々本多親下の御講演を拜聴いたし今では迷の夢も覺めて漸く法悦に浴することが出来かけたので益信仰を勵んで居ます、斯かる歎をばお一人でも多くにお願ひ致したいと思つてゐます、そこで當大阪で毎月 親下の御講演開催の新聞廣告が誠に貧弱で目に附きにくいやうですから、今後はもう少し大きく掲載して頂きたい其廣告料は乍不束私の出来得る限りは毎月寄附させて頂きます」と。お名前はと尋ねても人様にお告げする様な者ではないと匿名で寄附され飄然として去られたといふが何と清淨な崇高な信念を有して居られる事よ。出すことなれば雜誌代さへ二年も三年も打捨て顧みざる僧俗のある今日、口に精神教化を説いて身に物質利己に墮す偽善者多き今日、信仰合掌しつゝ本佛實在を認めざる垢重者が充てる今日、何と此篤志婦人こそ當に吾等を愧死せしむべき大丈夫ではありますまいか。かゝる事を書くは該婦人の素志に反すること御迷惑とは存じますが暑さの折柄一陣の冷風、編者自身の寶丹たらしむるのみ。

合掌

新刊

法華經要義

本多親下著

四六列六百三十餘頁
總振假名付
定價 金 參 圓
送料 十八錢

日蓮主義の心髓

本多親下著

四六列三百五十餘頁
總振假名付
定價 金壹圓八十錢
送料 十四錢

姉妹篇で平易簡明に講述されたれば誰れにも能く了解されます。
「教發行所及統一閣では定價一割引致します。秋期には更に「教義信條の整理」や「親下の傳記」が出版される豫定であります。

金六圓也
 金壹圓貳拾錢也
 金壹圓五拾五錢也
 金貳圓貳拾錢也
 金壹圓五拾錢也
 金壹圓貳拾錢也
 金貳圓貳拾錢也
 右難有入帳仕候

大 阪 堂 閣 寺 殿
 東 京 野 內 倉 治 吉 殿
 神 戶 後 藤 友 藏 殿
 山 口 中 田 增 太 郎 殿
 青 森 柏 木 吾 市 殿
 大 阪 富 田 清 子 殿
 瀨 松 林 勝 善 殿

「統 一」 會 計



暑 中 御 伺

淺 草 統 一 團
 全 地 明 會
 全 報 恩 閣
 大 森 妙 道 會
 本 鄉 正 道 會
 瀧 川 本 佛 教 會
 品 川 正 法 護 持 會
 川 崎 大 日 本 妙 道 會
 小 松 川 大 日 本 立 正 會
 橫 濱 法 悅 協 會
 品 川 統 一 編 輯 局



目 次

祖書五大部の綜合觀(其四完了).....	本多日生
佛子の自覺.....	本多日生
天風三萬里紀行(其三).....	小林日種
記 事.....
○ホノル、の野口上人、	○各地教報

第三十四年九月號

第三十四年九月一日發行 第四百十號